大学生の地元志向“移ろい”にかかわる予備的検討

平　尾　元　彦

要旨

大学生の地元志向の特徴のひとつである「移ろい」に焦点をあて、高校生から大学生としての就職活動終了時まで各段階での意識をとらえる。狭い地元志向・広い地元志向・非地元志向の３区分で計測すると、地方出身学生の約６割は、どこかのタイミングで変化する。就職活動の結果と比較しても、就活初期段階からは 25.5%が、大学初年次からは 36.8%が、なんらかの変化を経験していることがわかった。移ろいがもたらされる要因の解明が課題として残される。

キーワード

地元志向，就職活動，移ろい，地方大学生

1 はじめに

学生たちに「どこに就職したい？」と問うと、地域で返答する者がいる。特定の会社や業界を答える学生もいるが、「福岡か広島」や「九州」「西日本」など地名をあげての回答は多い。大学生の進路に“地域”は重要な位置を占めている。

本稿は、筆者らにより進められた「地元志向」に関する研究のうち、大学生の地元志向の変化を深めるための予備的検討である。これまでの研究では、山口大学の学生を対象とした意識調査とデータ分析により、大学生の地元志向は、①広い、②弱い、③移ろいやすい、との３つの特徴を指摘する。

第一点目は、学生たちが就職先として意識する地元は、県という単位より広い。何を持って「地元」を定義するかにもよるが、全国どこでもいいという者以外に、自分が考える地域がある。それは必ずしも県域と一致するわけではない。

第二点目の特徴は、平尾・重松（2006）で問題提起がなされ、平尾・田中（ 2016b ）で計測される。地元志向とキャリア形成力の関係をみると、ここでの定義による“弱い”学生が多いことを示す。これはキャリアセンターの現場感覚とも符合する。これから生きる地域を優先させるばかりに、自己分析や業界研究が深まらなくなる現実がある。

第三の「移ろい」に関しては、平尾・田中（ 2016a ）で、就職活動前後の意識と行動を比較しながら論を進める。大都市圏を志向していた地方学生が、結果的に地元就職を選んだり、その逆であったりということを、データ分析および一人ひとりの意識の変容のなかからとらえてきた。きっかけは人それぞれではあるが、変化は容易に訪れているようだ。移ろいやすい実態が浮かびあがる。

ただしこれまでの研究は、就職活動に焦点をあてるものであり、高学年次の意識と行動を分析したにすぎない。そもそも進学先の地域を選ぶ段階で地元志向があるのかないのか、その意識は大学生活を通じて継続されるのか否か。変化するとしたら、それはなぜなのか。解明すべき課題は多い。

本稿は、このような問題意識のもとに高校から大学生の就職活動までの地元志向の変化を把握する。大学卒業時のアンケート調査で高校時代までさかのぼって回答を求めた。変化の実態を明らかにする。

2 地元志向に関するアンケート調査

2.1 調査の概要

山口大学では毎年、卒業・修了する学生に対して「就職活動とキャリア教育に関するアンケート調査」を実施している。2020年３月卒業生には、前年12月から３月にかけて、医学部・共同獣医学部を除く全学部の学務窓口にて配布・回収する方法で実施した。この調査票に地元志向にかかわる設問を加えたものである。回答総数1450。このうち、卒業後の進路が就職である学生（したがって進学者や未定者は含まれない）は、1041名であった。

アンケート回答者は、2020年３月卒業生。卒業まぎわには新型コロナウィルスによる卒業式の中止などに見舞われた学年ではあるものの、調査票記載時はまださほどの影響がない時期であった。アンケート記載時点では就職活動は終了しているため、以下の分析にコロナの影響はないと見てよいと考えている。

2.2 基本集計

山口大学には、日本全国および海外からの学生たちが集う。当然ながらこの回答にも様々な学生が含まれる。本研究が地方圏の若者の地元志向の研究であることを明確にするため、ここでの集計は、中国・四国・九州（沖縄含む）出身学生のみを対象とすることとし、830名（79.7%）を抽出した。出身地が未回答であった79名（7.6%）と、対象地域外出身132名（12.7%）を除いた学生である。さらに、出身地（都道府県）、および、高校生から就職まで４つの段階の地域志向に関する設問の未回答者30名を除く800名を分析対象数とする。

表１に対象者の出身県と就職県の概略を示す。山口県出身者が約３分の１。県外が３分の２の構成である。以下、出身県への志向を計測するが、それは大学が所在する山口県という意味ではなく、それぞれの学生が表明する出身地という意味である。一方、就職先の県は、対象地域内が63.0%、地域外（その多くは大都市圏）が36.0%であった。

表１中国・四国・九州出身学生の出身県と就職県

	出身県		就職県	
山口県	271	33.9	199	24.9
広島県	137	17.1	93	11.6
福岡県	138	17.3	100	12.5
その他	254	31.8	120	15.0
地域外	－	－	288	36.0
合計	800		800	

アンケート調査では、「あなたは進路にかかわる“地域”をどのように考えてきましたか？」との言葉で、以下に示す８つの選択肢から回答を求めた（単一回答）。

１．実家から通えるところ
２．出身県内
３．出身県ではない近隣県
４．東京や大阪など大都市圏
５．その他国内
６．どこでもいい（全国各地）
７．外国
８．わからない・考えていない

このうち１と２を狭い意味での地元志向、３を広い意味での地元志向、４から８を地元志向ではないとして、それぞれ「地元志向（狭）「地元志向（広）」「非地元志向」と表記する。

タイミングとして設定したのは以下の４段階である。それぞれの時代の自分を思い出し

ての回答を求めた。順に「高校時代」「大学入学」「就活初期」「就活結果」と表記する。

○　高校生のとき（または浪人生のとき）、最も進学したかった大学のある地域
○　大学に入学したころ、将来の就職先として考えていた地域
○　大学生の就職活動の準備段階（おおむね３年生の10～２月頃）のころ、就職先として考えていた地域
○　大学生の就職活動の結果として選択した地域

3 大学進学から就職までの地元志向の変化

3.1 各段階での地元志向

対象者 800 名について、各段階の地元志向を表 2 にまとめる。先に示す選択肢の 1 から 3 の学生を地元志向とし、1+2 を地元志向（狭）、3 を地元志向（広）と表記する。それ以外は非地元志向である。

高校時代は広い地元志向が27.5%であるのに対し、大学入学時は10.0%に急低下する。おそらく進学先としては出身県以外の近隣大学を考えていた者が多く含まれるものと思われる。進学後の初年次には、出身県に帰るか、広い意味での地元にもこだわらずに全国で考えるのか、はたまた、何も考えていないのか。いったん地元志向が低下し、その後、緩やかに上昇するのは特徴的である。

表 2 各段階別地元志向学生数

	地元志向（狭）	地元志向（広）	非地元志向
高校時代	263（32.9）	220（27.5）	317（39.6）
大学入学	342（42.8）	80（10.0）	378（47.3）
就活初期	318（39.8）	113（14.1）	369（46.1）
就活結果	344（43.0）	133（16.6）	323（40.4）

３年生になって就職活動を意識し始めるころになると、地元志向は増える。就活初期で広い地元志向が増えるのは、全国どこでもいいわけではないけれど「このあたり」で就職したいと考える学生の気持ちのあらわれだろう。狭い広いあわせた地元志向率は、大学入学時52.8%から就活初期53.9%、就活結果59.6%へと高まる。いろいろ考えて活動した結果、出身県に落ち着く学生たちは一定数いることがわかる。

3.2 地元志向の変化

高校から大学へ、初年次から就活年次へ、そして、就職活動の前後、それぞれのステージで地元志向はどのように変化するのだろうか。

高校時代から大学生の就職活動の結果まで志向がまったく変わらない学生は35.8%だった。ここには県内の大学に進学して、１年生から県内就職を考え、結果的にそうなる学生。東京への進学を目指していたが結果的に山口大学に入学し、全国どこでも就職をずっと考えて結果的にそうなった学生。その両方が含まれる。

逆に64.3%はなんらかの変化を経験する。山口大学に入学してからの変化を見ても、入学時と就活前と後の３時点が一致するのは59.1%。４割ほどの学生は変化している。

表３は、２時点比較である。大学に入学する前（高校時代）と大学生の就職活動の結果が大きく異なるのはある意味当然なこととして、就職活動を意識しはじめる３年生のころから25.5%が、大学初年次から36.8%が、当時考えていたこととは異なる選択をしていることになる。この数は大きいのか小さいのか。さらなる比較研究を待たなければならないが、移ろいの実態があることは、間違いない。

さらに表４は、地元志向のパターン別に人数をカウントしたものである。大学入学時から変わらない学生が多いものの、県内希望で

表３　各段階別地域志向の変化有無別学生数と移ろい率

	変化なし	変化あり			
		地元志向（狭）	地元志向（広）	非地元志向	移ろい率（%）
高校時代 → 大学入学	462	81	171	86	42.3
→ 就活初期	422	103	164	111	47.3
→ 就活結果	382	114	164	140	52.3
大学入学 → 就活初期	630	76	21	73	21.3
→ 就活結果	506	106	41	147	36.8
就活初期 → 就活結果	596	54	44	106	25.5

各段階の始点の地域志向別の学生数
移ろい率は、志向が変化した学生の割合

表４　地元志向変化のパターン別学生数

狭 → 狭 → 狭	218	(63.7)	広 → 狭 → 狭	7	(8.8)	非 → 狭 → 狭	39	(10.3)
狭 → 狭 → 広	19	(5.6)	広 → 狭 → 広	0	(0.0)	非 → 狭 → 広	2	(0.5)
狭 → 狭 → 非	29	(8.5)	広 → 狭 → 非	0	(0.0)	非 → 狭 → 非	4	(1.1)
狭 → 広 → 狭	4	(1.2)	広 → 広 → 狭	9	(11.3)	非 → 広 → 狭	4	(1.1)
狭 → 広 → 広	17	(5.0)	広 → 広 → 広	35	(43.8)	非 → 広 → 広	17	(4.5)
狭 → 広 → 非	5	(1.5)	広 → 広 → 非	15	(18.8)	非 → 広 → 非	7	(1.9)
狭 → 非 → 狭	14	(4.1)	広 → 非 → 狭	1	(1.3)	非 → 非 → 狭	48	(12.7)
狭 → 非 → 広	2	(0.6)	広 → 非 → 広	4	(5.0)	非 → 非 → 広	37	(9.8)
狭 → 非 → 非	34	(9.9)	広 → 非 → 非	9	(11.3)	非 → 非 → 非	220	(58.2)
合　計	342		合　計	80		合　計	378	

「狭」は地元志向（狭）、「広」は地元志向（広）、「非」は非地元志向を表す
（　）内は、始点の学生数に占める割合（%）

きたが結果的に県外になったり、非地元の学生が就職活動前に地元志向に変わったり。様々な変化がみられる。興味深いのは、非地元を意識し続けた学生が結果的に地元を選ぶことである。入学時も就活前も対象地域以外を希望した学生のうち、12.7%が出身県へ、9.8%が近隣県へ就職を決めている。

入学時に県内志向だった学生のうち、就活当初も県内志向でありながら県外に決まった者は48名（14.1%）。近県への就職者を除いても29名（8.5%）は地域外を選択する。地元志向は必ずしも固定的ではなく、ここに移ろいの実態があらわれていると言えるだろう。

4 おわりに

高校生であっても、大学生であっても、進路選択で地域を意識する者は多い。どこでもいいとの考え方も含めて、自分の生き方の選択として地域を考えるのは当然である。高校時代の進学先選びから、大学入学後の就職先選びまで、地域に関する志向は一貫しているかというと、必ずしもそうではない。本稿では、学生が自認する出身県を軸に、地域志向を３パターンに区分し、それぞれの段階での

志向を計測した。比較的大くくりの地域であっても学生たちの志向は変化することがわかった。

ただし今のところ、その数値の大小を議論できるほど成熟してはいない。かつ、変化の要因を解明するところまでは至っていない。その意味で、地元志向の変化に関する研究の予備的検討にとどまっていることは明確にしておかなければならないと考えている。

このアンケート調査を実施したあとに、次の学年の学生を対象に地元志向の変容を深める準備をしていた。そこに到来した新型コロナウィルスは学生たちの就職活動を大きく変化させるとともに、調査の実施をも困難にした。コロナ禍で地元志向はどうなるのだろうか。新たな課題にも直面しながら、さらなる研究に取り組んでいきたい。

大学生の地元志向は、様々移ろう。あまり固定的に考える必要もなく、変化を受け入れ、そして、楽しむくらいの“おおらかさ”が必要だろう。移ろいを前提としたキャリア教育が求められている。

（学生支援センター　教授）

【参考文献】

(1) 平尾元彦・重松政徳，2006，「大学生の地元志向と就職意識」『大学教育』第 3 号，161-168.

(2) 平尾元彦・田中久美子， 2016a ，「就職活動を通じた地元志向の変化」『大学教育』第13号，65-71.

(3) 平尾元彦・田中久美子， 2016b ，「大学生の地元志向とキャリア意識」『キャリアデザイン研究』第12号，85-92.